

# 経済マンスリー [原油]

## 注目されるイラクの産油量増加

原油価格 (WTI 期近物) は、2 月下旬から 3 月中旬にかけてキプロス問題などが重石となり、1 バレル 90~93 ドル台のレンジで軟調に推移した後、同月下旬のキプロス支援合意を受けて、同 97 ドル台まで再上昇した (第 1 図)。一方、4 月に入ってから、世界景気の先行き不安などから下落に転じ、足元では同 90 ドルを割り込む状況となっている。

原油市場では米国シェールオイルの生産拡大が注目されているが、イラクにおける原油生産の回復も見逃せないところである。イラクの産油量はイラン・イラク戦争 (1980~88 年)、湾岸戦争 (1991 年)、イラク戦争 (2003 年) の際に急減したが、その後の情勢改善に伴い回復傾向にある。特に 2012 年は、輸出拠点が新設されたこと等から産油量が日量 295 万バレルに達し、1979 年以来の高水準となった (第 2 図)。2012 年はイランの産油量が欧米の経済制裁の影響等により大きく減少したが、結果的にはイラクの増産分がイラン減産分を相殺する役割を果たした。

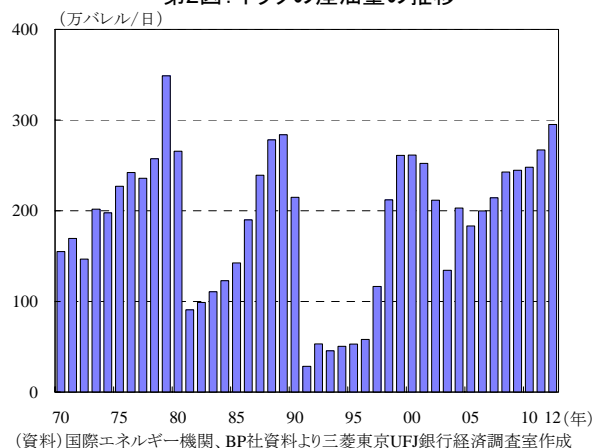
イラクはベネズエラ、サウジアラビア、カナダ、イランに次いで豊富な原油埋蔵量を保有しているが、イラン・イラク戦争以降、新規油田開発は停止していた。しかし、2009 年に 1 回目の国際入札が実施され、大手外国石油会社が落札した。治安情勢や未整備の法体制などへの懸念はあるが、油田開発への期待は大きく、今年は 5 回目の国際入札が予定されている。また、国際エネルギー機関 (IEA) は「世界エネルギー見通し 2012」において、イラクは 2030 年代までにサウジアラビアに次ぐ世界第 2 位の原油輸出国になるとの見通しを示しており、今後、原油供給国として存在感を高めてくるものとみられる。

中期的には、世界の原油需要は新興国を中心として増加が見込まれているが、イラクや米国の供給力拡大により需給バランスが緩和する可能性もあろう。

第1図: 原油価格 (WTI 期近物) の推移



第2図: イラクの産油量の推移



照会先：三菱東京 UFJ 銀行 経済調査室 石丸 康宏 yasuhiko\_ishimaru@mufg.jp  
篠原 令子 reiko\_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。